

令和 3 年 11 月 17 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02168

研究課題名（和文）HIV陽性者の肯定的対処と&lt;生&gt;再構築を促す統合的Web支援ツール開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of integrated Web support tool that promotes positive coping and &lt;lifeconstruction of HIV-positive people

研究代表者

井上 洋士（INOUE, YOJI）

順天堂大学・医療看護学研究科・特任教授

研究者番号：60375623

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、統合的な Web 支援ツール活用により、孤立しがちなHIV陽性者の健康と生活の質支援を目指すこととした。2017年度は既存の HIV 陽性者対象大規模調査データの2次分析及び国内外でウェブを利用した患者支援の事例レビューを実施。2018年度はその分析結果をもとにWeb 支援ツールの設計・開発をした。ただし途中でU=Uすなわちウイルス量が半年以上継続して検出限界未満であるならば他者への性感染は一切しないというエビデンスの発表がなされたため戦略修正に時間を要した。2019年度はWeb 支援ツール公開を行いHIV 陽性者対象調査実施、2020度はデータ分析を通じて評価を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

HIV 陽性者は HIV 関連スティグマのために孤立しがちであり、地域の対面支援サービスを活用しにくい。肯定的対処につながる姿勢を獲得できる機会を対面とは異なるサービス形態で提供しなければ、彼らの安定した<生>の再構築や QOL 向上は実現しにくい。HIV陽性者など疾患を抱えつつ社会的に孤立しがちな人々へ、多彩な ICTコンテンツを統合した形での Web 支援ツールを企画・開発し提供し利用してもらうことは、直接的な対面サービスを超えて<生>の再構築と QOL 向上促進効果に通じる重要な資源となりうる事が今回示された。ただし不十分な点もあるため、今後の発展に引き続き取り組んでいきたい。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to support the health and QOL of HIV-positive people who tend to be isolated by utilizing integrated Web support tools. In the first year, she conducted a secondary analysis of the existing large-scale survey data for HIV-positive individuals and a case review of patient support using the Web in Japan and abroad. In the second year, we designed and developed a Web support tool based on the analysis results. However, it took time to correct the strategy because the U=U evidence was announced. U=U means, if the viral load is below the detection limit for more than half a year, sexually transmitted infections to others will not occur. In the 3rd year, the Web support tools was made public and a survey was conducted for HIV-positive persons, and in the 4th year, it was evaluated.

研究分野：健康社会学

キーワード：健康情報 ヘルスリテラシー ウェブ情報 スティグマ 感染症

## 1. 研究開始当初の背景

日本国内の HIV 陽性者数は、2015 年末において 2 万 7 千人を超えている。HIV 感染症は著効を奏する抗 HIV 薬が開発され、治癒はしないものの、適切な治療を受ければウイルスを抑え込み身体的には健康を維持することが可能な慢性疾患的な位置づけとなった。本研究プロジェクトの研究者らはこれまで、こうした HIV 陽性者の健康支援のために調査研究を実施し、生活上の困難な実態を明らかにし、支援すべき要点を明確化する研究をしてきた。その結果、HIV 陽性者らは陽性告知を受けた後、社会の HIV 関連スティグマ（差別や偏見）のために孤立しがちであり、モデルとなる他の HIV 陽性者や支援者と出会うことが困難な中、地域で支援を得られずに否定的対処を繰り返し、生存・生活・人生といった「生」を安定的に再構築できない様相が示された。

よって、本研究で操作的に定義する「自分なりの肯定的な病いとの向き合い方」である「肯定的対処」につながる姿勢を獲得する機会を、対面支援サービスとは異なる形態で提供しなければ、彼らの安定した「生」の再構築や QOL (quality of life) 向上は実現しにくいと強く考え、新たに Web 活用による支援策創出に着眼するに至った。

一般人は、何らかの疾患の診断結果を知らされたときに、否認、怒りや抑うつといった否定的反応をし、混乱し、危機的な状況に陥りがちである。しかし通常は、受容や適応などと言われる「自分なりの病いの受け止め」を経て、自分の「生」を再構築していく。HIV 陽性告知をされるときにも同様ではあるが、さらにスティグマに加えて、更新されにくい「死ぬ病気」というイメージをそのまま持っている中で陽性告知されるために、告知がトラウマティックイベントになり、逆境下ストレスを受ける状況に置かれ健康を悪化させる可能性が高い。実際、我々が 2010 年に HIV 陽性者対象に行った調査では、HIV 陽性告知を受けた当時、約 6 割が死ぬ病であると「大いに・そう思って」いた。そのため、自己価値や自尊心などの低下をきたし、精神健康を悪化させている。日本の HIV 陽性者の 54.4%にうつ・気分障害が疑われるとする調査結果もある。

一方、慢性疾患など、病いとともに生きることに関するこれまでの先行研究を概観すると、肯定的対処を促進するためのケアの方策として、情緒的サポートネットワークやピアサポートの活用、自身の置かれている状況を客観視し理解すること、ストレス対処力を向上させることなどが有効と指摘されている。しかし、これらの多くの方策は、他者に自分自身の病名を打ち明け、地域で社会関係を保持する中で初めて実現する対面支援サービスという特性がある。我々が実施した調査では、HIV 陽性と誰か他の人に話すときにとても用心すると 87%が回答し、約 2 割で、実際に会って HIV について率直に話せる人が誰もいなかった。そのため、患者交流会、NGO/NPO 支援相談窓口など日本国内にも肯定的対処を促すような対面支援サービスが都市部中心に存在するが、孤立し閉じた中で生きる人々はそれらを利用しにくい。また日本での HIV 陽性者は、20 代・30 代と若い世代が多くを占める特徴があり、大多数がスマートフォンやパソコンを通じて Web を利用していると考えられ、対面でなく Web を活用し支援することは十分に有効と考えられる。

Web を通じた患者会やピアサポートは、たとえばがん領域などでも見受けられ、また同じ患者同士のナラティブ情報の共有により治療や生活の自己決定を押し進めるなどの試みは日本でもある。

安定的対処と QOL 向上を目標として e ラーニングシステムを含めた統合的な Web 支援ツールを構築し地理的空間から解放された健康支援を積極的に行う試みは日本ではほぼ皆無である。HIV 陽性者など疾患を抱えつつ社会的に孤立しがちな人々へ、双方向性も確保した多彩なコンテンツを統合した形での Web 支援ツールを企画・開発し提供し利用してもらうことは、直接的な対面サービスを越えて「生」の再構築と QOL 向上促進効果に通じる重要な資源となりうる。

## 2. 研究の目的

HIV 陽性者は HIV 関連スティグマ（差別や偏見）のために孤立しがちであり、地域の対面支援サービスを活用しにくい現状にある。肯定的対処につながる姿勢を獲得できる機会を対面とは異なるサービス形態で提供しなければ、彼らの安定した「生」の再構築や QOL 向上は実現しにくい。そこで本研究では、Web の活用に着目し、統合的・双方向的な Web 支援ツール活用による健康支援を目指す。そのために既存の HIV 陽性者対象大規模調査データの 2 次分析及び国内外での Web や e ラーニングを利用した患者支援の事例レビューを実施し、その分析結果をもとにした Web 支援ツールの設計・開発・公開をし、HIV 陽性者対象調査実施を通じた評価を行う。また、同ツールの持続可能性や今後の活用法を探り、バーチャルな患者支援・健康支援のあり方の理論化を目指す。

## 3. 研究の方法

研究体制は、調査分析グループと Web 支援ツール開発グループの 2 グループで役割分担し、HIV 陽性者参加の当事者参加型研究形式を採用した。

当初は、研究期間を 4 フェーズに分けて実施する予定としていた。2017 年度は「形成フェーズ」とし、調査データ分析を通じて Web 支援ツールのデザイン開発・ツール作成のための戦略・企画を具象化することとしていた。2018 年度は「開発フェーズ」として Web 支援ツールデザイン開発とツール作成、仮公開とモニター対象の FGD による調査、分析結果に基づいた Web 支援ツールの修正をすることとしていた。2019 年度は「実施フェーズ」とし、Web 支援ツールの公開と利用の促進を図り、公開半年後に HIV 陽性者を対象とした Web 調査の実施をすることとしていた。2020 年度は「評価・総括フェーズ」とし、2020 年度実施の調査データの分析により Web 支援ツール評価をし全体を通じた提言・総括を行うものとした。

しかしながら、研究方法の実際については、様々な状況変化を理由として、軌道修正を余儀なくされることとなった。主な理由は以下の 3 つによる。

第一に、U=U (Undetectable=Untransmittable) という考え方が 2018 年前後から世界的に大きく支持ようになったということである。これは、抗 HIV 療法を継続することで、血中のウイルス量が 200 copies/mL 未満の状態を 6 ヶ月以上維持している状態の HIV 陽性者は (「Undetectable: 検出限界値未満」) 他の人に性行為を通じて HIV 感染させることは一切ない (「Untransmittable: HIV 感染しない」) というものである。つまり、治療薬の進歩により、効果的な治療を受けていれば他者への性感染リスクはゼロになったという、画期的なものであった。U=U は、世界的に長い期間の研究を積み重ねて出た結論であり、100 개국以上の国々から支持されるようになった。日本でも 2018 年から日本エイズ学会等が支持を表明するようになった。HIV は性感染症であるとともに、他者感染させるかもしれないリスクが人権やスティグマともかかわってくる。HIV 感染症のなかでも大転換期ともいえるこの U=U の明白なエビデンスと世界的支持が明確である以上、本研究で開発する Web 支援ツールのメインとして大きく取り入れる必要性が出てきたといえ、スケジュールを見直しつつ新たな開発をすることにした点である。

第二に、性感染症への取り組みである。そもそも HIV 感染症は性感染症であるが、ここ 2、3 年の動向として、HIV 感染症を単体で取り組むのではなく、他の性感染症とセットで情報提供をしていくことが効果的であるとの動きが国内外で大きく起こりつつある。そのため、今回、性感染症についても自分事ととらえチェックができる機能を入れるべきであるとの結論に達し、こちらについても Web 支援ツールに入れ込むこととした。

第三に、COVID-19 のパンデミックにより余儀なく計画変更することとなった点である。本研究では当事者参加型研究をメインに据えて進めることとしていたが、直接対面で会い議論をすることが困難になった。また、当事者だけでなく研究者も、テレワークへの変更や、生活パターンの修正など、日常生活上で大きな変動が起こり、余裕のない状況に陥り、全体として遅れることとなった。特に「評価・総括フェーズ」については、COVID-19 のパンデミックと完全に重なるスケジュールとなったために、日程を少し遅らせたり、Web 会議を多用したり、調査回答協力者数の伸び悩みに対しては回答期間を延長したりするなどの措置を施した。

## 4. 研究成果

### (1) 2017 年度: 「形成フェーズ」

プロジェクトの初年度は「形成フェーズ」として位置づけ、主に 4 つの研究を行った。

「1) HIV 陽性者 Web 調査データをもとにした形成的 2 次分析」は、2016 - 17 年に実施した HIV 陽性者対象の調査での有効回答 1,038 名分のデータ及び 2013 - 14 年に実施した 913 名分のデータをもとに、一部マッチングも行い、パネル調査としてのデータベースを作成した。これらをもとに、肯定的指標に関する縦断分析等を試行した。

「2) 患者支援 Web/e ラーニング活用事例調査とレビュー」では、2007 年から 2017 年までに発行された学術論文を調査対象とし、医学中央雑誌データベース及び PubMed データベースから「インターネット 支援 患者 HIV」「Internet patient support HIV」のキーワードを組み合わせて文献調査した。結果として、日本語文献は見当たらず、英語文献は 35 件を抽出し、それらの内容をレビューした。対照群を設けた介入研究はほぼ存在せず、介入前後での指標となる変数での変化を見たものや、介入そのものの実践報告に近いものなどが主流であり、指標となる変数も様々なものが用いられ、統一性は見受けられなかった。

「3) Web 支援ツール開発に向けた「ナレッジリポジトリ」作成」

「4) 病いへの対処、<生>再構築、Web を用いた健康支援に関する理論と先行研究の整理」は、上記 1) と 2) を統合して実施するものであるが、得たデータの複雑さ等から構築途上の段階で初年度は終了した。得られた成果については、日本エイズ学会等の学術集会・大会での発表を実施し、また 2018 年度については第 22 回国際エイズ会議での報告をする方向性を確認した。

### (2) 2018 年度: 「開発フェーズ」

2018 年度については「開発フェーズ」として位置づけ、2017 年度に得られた文献レビューで

の知見をもとに、Web 支援ツールの設計と開発を実施した。当初の目標に照らして、当事者参加型形式でのディスカッションの場を設けて十分な検討を加えたが、HIV 感染症をめぐる急速な研究成果の公表が相次ぎ、どのようなウェブサイト構築すればよいのか着地がうまくいかない状況になった。特にアムステルダムで開催された 22nd International AIDS Conference では、ここまでの成果の一部を報告したものの、国際的には、治療薬によってウイルス量が検出限界未満になれば他者への性感染は一切なくなるという研究成果が発表され、HIV 陽性者にとって大きな環境変化につながると考えられた。そこでこれを踏まえた設計に切り替えるべきであるとの意見が多勢を占めたために、その方向性へと切り替える判断をすることとし、当初予定よりも遅らせてでもこの重要な知見を活かしたウェブサイトにすることとした。

### (3) 2019 年度：「開発フェーズ」の継続、および「実施フェーズ」

2019 年度は、2018 年度の方向転換を引き継ぎ、「開発フェーズ」の継続と「実施フェーズ」と位置付け、これまで検討してきた Web 支援ツール最終版公開および Web 支援ツール評価のための HIV 陽性者対象大規模 Web 調査実施を実施した。具体的には、Web 支援ツールの最終版を公開し、HIV 陽性者向け各種 Web ページ、あるいは大々的な PR により HIV 陽性者らの利用を促進すること、および、Web 支援ツール公開半年後に、日本国内 HIV 陽性者千人ほどの回答を想定した大規模 Web 調査を開始、Web 支援ツール利用状況に加え、アウトカム評価指標として肯定的対処、positive change、精神健康・主観的健康、生きがい、ストレス対処力 SOC (Sense of Coherence) 属性・特性・健康状態を調べることを予定し準備した。

研究実績としては、前者の Web 支援ツールについては、「性病リスク・セルフチェック」ウェブサイト制作を軸として、就労支援、薬物使用者への支援、HIV 陽性告知をされて間もない人への支援、U=U などを組み合わせることにより、総合的な支援ツールの公開を 2019 年度内に達成することができた。

後者の支援ツール評価のための調査については、Web 支援ツール制作と公開の遅れから、先行して 2019 年 11 月から調査開始するものとし、公開後については、予定通り、Web 支援ツールへの曝露状況とアウトカム評価指標との関連性を検討できる構成とした。2020 年 5 月末日で 565 人からの回答を得たが、2020 年度も継続して調査を実施することとした。来年度についても引き続きオープンな形で広報をし、回答協力者を募集した。

### (4) 2020 年度：「評価・総括フェーズ」

2020 年度は、開設したウェブサイトの評価をする年度として位置付けた。具体的には、2019 年 11 月から 2020 年 7 月に、同ウェブサイトにかかわる大規模なウェブ調査を実施した。対象は日本国内の HIV 陽性者と設定し、前年度から引き続きオープンな形で広報をし、回答協力者を募集した。結果として最終的に有効回答者 908 人の回答が得られ、それらをデータ化した。データ分析の結果、同ウェブサイトにアクセスしたことがある人は 33.6% (305 人) に上っていることがわかった。コンテンツのうち「役立った」との回答が多かったのは、「U=U (Undetectable=Untransmittable)」(138 人) 次いで「性病リスク・セルフチェック」(65 人)、「HIV と就労」(65 人) の順になっていた。今後新たに付け加えてもらいたい内容を自由記載でたずねたところ 118 人が回答し、医療・服薬・病院、人間関係 (恋愛・出会い・SNS など) に関する情報、仕事やメンタルヘルスや老後に関する情報のニーズが多く挙げられていた。

以上から、本研究で開設したウェブサイトには HIV 陽性者が一定程度アクセスしたこと、またアクセスした方々にとっては概ね有用とされていることが示された。今後は、さらなるニーズに合わせたコンテンツの修正などを行い、この Web 支援ツールを発展させ、HIV 陽性者の生活の質や < 生 > の向上に寄与する内容にしていくことが求められる。

また、今回は新型コロナウイルス感染拡大時期と重なり、当事者である HIV 陽性者らとは、ZOOM やメール等ではやり取りしたものの、直接膝をつき合わせて議論しつくすことができず、彼らの使い勝手を十分に反映させた Web 支援ツール構築ができたとはいいいがたいところもある。今後の改善においては、ICT の進歩を見据えながら、本来ならではの当事者参加型でのプロジェクト進行を積極的に進めていくことが必要となり、その試金石とも今回の研究プロジェクトはなりえたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 細川陸也, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 阿部桜子, 片倉直子, 若林チヒロ, 大木幸子, 山内麻江, 塩野徳史, 米倉佑貴, 大島岳, 高久陽介	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 HIV陽性者の子どもを持つことへの思いと医療機関における相談・情報提供の実状	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本エイズ学会誌	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木達郎, 井上洋士, 板垣貴志, 戸ヶ里泰典, 細川陸也, 阿部桜子, 片倉直子, 山内麻江, 矢島嵩, 若林チヒロ, 大木幸子, 高久陽介	4. 巻 20
2. 論文標題 Futures Japan「HIV陽性者のためのウェブ調査」回答者の属性・特性分析を通じた当事者参加型ウェブ調査の有効性の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本エイズ学会誌	6. 最初と最後の頁 186 - 198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Togari T, Inoue Y, Abe S, Hosokawa R, Takaku Y	4. 巻 5
2. 論文標題 HIV-Related Health Status, Adherence, and Stress Coping Capacity among Men Living with HIV in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 HIV/AIDS Res Treat Open J	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Togari T, Inoue Y, Abe S, Hosokawa R, Takaku Y	4. 巻 5
2. 論文標題 HIV-Related Health Status, Adherence, and Stress Coping Capacity among Men Living with HIV in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 HIV/AIDS Res Treat Open J	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上洋士, 板垣貴志, 矢島嵩, 大島岳, 高久陽介	4. 巻 19
2. 論文標題 HIV陽性者のPre-Exposure Prophylaxis (PrEP)に関する認知・興味と 利用意向の実態, およびそれらとヘルスリテラシーとの関係性の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本エイズ学会誌	6. 最初と最後の頁 185-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上洋士, 板垣貴志, 仲倉高広, 佐藤未光, 矢島嵩, 高久陽介	4. 巻 19
2. 論文標題 Sexual Compulsivityスケール日本語版Ver.1の開発と、信頼性、妥当性及びカットオフ値の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本エイズ学会誌	6. 最初と最後の頁 150-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上洋士	4. 巻 84
2. 論文標題 エイズ対策に関わる当事者参加型リサーチの実際と公衆衛生活動への示唆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 公衆衛生	6. 最初と最後の頁 812-817
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1401209525	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件(うち招待講演 5件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 大島岳, 阿部桜子, 細川陸也, 塩野徳史, 米倉佑貴, 片倉直子, 山内麻江, 河合薫, 若林チヒロ, 大木幸子
2. 発表標題 日本人HIV陽性者におけるストレス関連成長の実態とその特徴
3. 学会等名 第33回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島岳, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 米倉佑貴, 阿部桜子, 塩野徳史, 細川陸也, 山内麻江, 片倉直子, 河合薫, 若林チヒロ, 大木幸子, 渡邊淳子, 梅沢寛子, 板垣貴志
2. 発表標題 差別偏見を感じているHIV陽性者当事者の対処戦略に関する自由記載のテキストマイニング分析
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 米倉佑貴, 大島岳, 阿部桜子, 塩野徳史, 細川陸也, 山内麻江, 片倉直子, 河合薫, 若林チヒロ, 大木幸子
2. 発表標題 HIV陽性者における依存性薬物使用の変化とストレス関連成長・ストレス対処力との関連 - 3年間の縦断データ分析より -
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 塩野徳史, 細川陸也, 米倉佑貴, 大島岳, 片倉直子, 若林チヒロ, 山内麻江, 阿部桜子, 河合薫, 梅沢寛子, 渡邊淳子, 大木幸子, 高久陽介
2. 発表標題 HIV陽性者でのTreatment as Prevention (TasP) の認知状況と性生活・メンタルヘルスとの関連
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細川陸也, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 若林チヒロ, 阿部桜子, 塩野徳史, 米倉佑貴, 片倉直子, 山内麻江, 大島岳, 大木幸子
2. 発表標題 HIV陽性者の子どもを持つことの現状
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 米倉佑貴, 大島岳, 阿部桜子, 塩野徳史, 山内麻江, 片倉直子, 若林チヒロ, 河合薫, 細川陸也, 大木幸子
2. 発表標題 HIV陽性者におけるレクリエーションドラッグ使用の変化—3年間の縦断データ 分析より—
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阿部桜子, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 若林チヒロ, 細川陸也, 塩野徳史, 片倉直子, 山内麻江, 大島岳, 大木幸子, 米倉佑貴, 河合薫, 渡邊淳子, 梅沢寛子
2. 発表標題 HIVに関連したスティグマと感染後年数との関連の検討
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細川陸也, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 高久陽介, 若林チヒロ, 阿部桜子, 塩野徳史, 米倉佑貴, 片倉直子, 山内麻江, 大島岳, 大木幸子
2. 発表標題 HIV陽性者のかかりつけ医への通院状況
3. 学会等名 第32回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 若林チヒロ, 塩野徳史, 細川陸也, 板垣貴志, 米倉佑貴, 大木幸子
2. 発表標題 日本人HIV陽性者におけるメンタルヘルスの実態と社会的要因・治療歴との関連
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Inoue Y, Abe S, Togari T, Oshima G, Katakura N, Yamauchi A, Takaku Y, HIV Futures Japan Project
2. 発表標題 Status of HIV/AIDS-related Stigma and Its Relationship with the Mental Health of HIV-positive Persons in Japan
3. 学会等名 22th International AIDS Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸ヶ里 泰典, 井上 洋士, 板垣 貴志, 米倉 佑貴
2. 発表標題 HIV陽性者男性におけるsense of coherenceの実態と健康・健康行動との関連
3. 学会等名 第27回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 片倉直子, 山内麻江, 大島岳, 板垣貴志, 若林チヒロ
2. 発表標題 2016-17年のHIV陽性者の健康状態及び健康管理行動とそれらの3年間の変化から見える課題
3. 学会等名 第44回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島岳, 井上洋士, 戸ヶ里泰典, 板垣貴志, 米倉佑貴, 若林チヒロ
2. 発表標題 HIV陽性者当事者参加型リサーチの自由記述における行為遂行性
3. 学会等名 第44回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 大島岳, 板垣貴志, 米倉佑貴, 若林チヒロ
2. 発表標題 国内在住のHIV陽性男性におけるレクリエショナルドラッグの使用と社会的要因との関連性
3. 学会等名 第44回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上洋士
2. 発表標題 患者視点から医療者とのコミュニケーションと潜在的なメンタルヘルス課題
3. 学会等名 第31回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井上洋士
2. 発表標題 いまHIV陽性者が背負っているスティグマ
3. 学会等名 第31回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸ヶ里泰典, 井上洋士, 高久陽介, 矢島嵩, 阿部桜子, 板垣貴志, 細川陸也, 若林チヒロ, 大木幸子
2. 発表標題 男性HIV 陽性者におけるアルコール依存症の実態と関連要因
3. 学会等名 第31回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大島岳、矢島嵩、高久陽介、井上洋士
2. 発表標題 HIV Futures Japan プロジェクトにおける当事者の参画の意義と現在の課題
3. 学会等名 第31回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井上洋士、戸ヶ里泰典、板垣貴志、阿部桜子、細川陸也、若林チヒロ、山内麻江、大木幸子、片倉直子、大島岳、矢島嵩、高久陽介
2. 発表標題 HIV Futures Japan プロジェクトにおける5年間の当事者参加型リサーチ（PR）の様相に関する研究者側から見た考察
3. 学会等名 第31回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井上洋士
2. 発表標題 HIV Futures Japanプロジェクトの3回にわたるウェブ調査結果から見たHIV陽性者のQOLの推移
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会・総会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上洋士
2. 発表標題 保険薬局 薬剤師として求められること ～HIV Web調査から～
3. 学会等名 関西HIV・薬剤Workshop（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上洋士, 四本美保子, 木南拓也, 岩橋恒太
2. 発表標題 akta talk show 専門家に聞こう! 「U=Uキャンペーンとは何か? ~これまでとこれからのHIV/エイズの取り組み」
3. 学会等名 コミュニティセンターakta (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Bruce Richman, Simon Collins, Stephane Wen-Wei Ku, 松下修三, 生島嗣, 高久陽介, 井上洋士, 田沼順子, 白阪琢磨, 大北全俊
2. 発表標題 International HIV Symposium on U=U - Is 'Can't Pass It On' Real?
3. 学会等名 日本エイズ学会国際シンポジウム ヴィーブヘルスケア医学教育事業助成 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上洋士
2. 発表標題 HIV陽性者のPatient Journeyにおけるコミュニケーションの課題: 恋愛と性生活
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会・総会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 黒澤貞夫, 石橋真二, 上原千寿子, 白井孝子, 井上洋士, 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央法規出版株式会社	5. 総ページ数 346
3. 書名 介護福祉士実務者研修テキスト【第4巻】こころとからだのしくみ 第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	戸ヶ里 泰典 (Togari Taisuke) (20509525)	放送大学・教養学部・教授  (32508)	
研究分担者	関 由起子 (Seki Yukiko) (30342687)	埼玉大学・教育学部・教授  (12401)	
研究分担者	若林 チヒロ (Wakabayashi Chihiro) (40315718)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授  (22401)	
研究分担者	米倉 佑貴 (Yonekura Yuki) (50583845)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教  (32633)	
研究分担者	片倉 直子 (Katakura Naoko) (60400818)	神戸市看護大学・看護学部・教授  (24505)	
研究分担者	細川 陸也 (Hosokawa Rikuya) (70735464)	京都大学・医学研究科・講師  (14301)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------